１　自己評価及び外部評価結果

【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	0371300203		
法人名	社会福祉法人　共生会		
事業所名	グループホーム　アミーチ		
所在地	岩手県二戸市似鳥字上平１５番地１		
自己評価作成日	平成27年11月18日	評価結果市町村受理日	平成28年5月9日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。（↓このURLをクリック）

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/03/index.php?action_kouhyou_detail_2015_022_kihon=true&JigyosyoCd=0371300203-00&PrefCd=03&VersionCd=022

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	公益財団法人いきいき岩手支援財団
所在地	岩手県盛岡市本町通3丁目19-1　岩手県福祉総合センター内
訪問調査日	平成27年12月10日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

・利用者が個々のペースに合わせて、ゆとりのある生活が送れるように支援している。
・掃除や食事等の日常生活の中で、本人が出来る事を引き出していけるような努力をしている。
・地域のイベント・行事には積極的に参加し、施設内でも季節に合わせた行事を企画するなどして気分転換を図り、利用者間や地域との交流・親睦を深めている。
・周りに自然が多く散歩したり、畑を作り利用者と職員と協力して野菜を育てたりして、季節を食事や体で感じる事が出来る。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

開設から11年目の当事業所は、同敷地内に、特別養護老人ホームが併設されていて、バックアップ体制がある中で運営されている。入居者の状況は、平均年齢89歳と高く、入居期間についても、開所当時からのいる方など、当事業所で長く暮らしている人が多い。このような現状の中で、食事は口から食べる、そして、自分の足で歩いて生活することを大切にしたケアを提供し、食事づくりへの参加、掃除、洗濯たたみ等、一人ひとりの思いをキャッチしながら、出来ることを引き出す支援を日々実践している。

Ｖ．サービスの成果に関する項目（アウトカム項目）　※項目№1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる（参考項目：23,24,25）		1. ほぼ全ての利用者の
		○	2. 利用者の2/3くらいの
			3. 利用者の1/3くらいの
			4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある（参考項目：18,38）	○	1. 毎日ある
			2. 数日に1回程度ある
			3. たまにある
			4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている（参考項目：38）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている（参考項目：36,37）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている（参考項目：49）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている（参考項目：30,31）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている（参考項目：28）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている（参考項目：9,10,19）		1. ほぼ全ての家族と
		○	2. 家族の2/3くらいと
			3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている（参考項目：2,20）		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度
		○	3. たまに
			4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている（参考項目：4）		1. 大いに増えている
		○	2. 少しずつ増えている
			3. あまり増えていない
			4. 全くいない
66	職員は、活き活きと働けている（参考項目：11,12）		1. ほぼ全ての職員が
		○	2. 職員の2/3くらいが
			3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての家族等が
		○	2. 家族等の2/3くらいが
			3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどできていない

自己評価および外部評価票

〔セル内の改行は、（Altキー）＋（Enterキー）です。〕

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	外部評価 次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	いつでも目につくところに掲示し、日々意識して仕事に望めるようにしている。	法人の理念を元に、職員間で話し合って作ったものである。職員直筆になっており、食堂・談話室の壁の目に届く位置に掲示し、職員には浸透しており、ケアを提供する上での拠り所になっている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の小・中学校からご招待頂く為、春には運動会・体育祭、秋には学習発表会・文化祭に必ず出掛けて交流を深めている。又、市内のイベントにも積極的に出掛けるようにしている。	地域で行われる季節毎のイベント（二戸まつり、輪投げ大会等）参加のために、出かける機会を多く支援し、その中で、地域の人と交流が図られている。事業所が丘陵に立地し、集落から少し離れていることもあり、普段の暮らしの中での近隣の人の立ち寄ってくれる機会は少ない。	利用者が地域とつながりながら暮らしていくことを支援するために、普段の暮らしの中で近隣の人たちが立ち寄ったり、遊びに来てくれる関係づくりに向けて、更なる取り組みを期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の小・中学校との交流を通じて地域の方々と触れ合いをする事で理解を深めて頂けるようにし、利用者が縫った雑巾を地域の小・中学校に寄付している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	利用者の現状報告や行事報告、事故等の報告を行ない、率直にご意見を頂き改善に繋げたり、励ましを頂いたりしている。	会議は、2ヶ月に1回の定例開催になっている。市担当者、民生委員等そして家族も参加メンバーとなっており、質問・意見そして助言をいただく等、双方向的な会議になっている。会議終了後は、利用者のありのままの生活と、事業所の取り組みを見てもらう機会にもつなげている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議を通じて、市の職員の方にも現状を分かって頂けるようにしている。又、更新手続き等は出来るだけ窓口に持っていく事で、馴染みの関係を築けるようにしている。	市の担当者が運営推進会議に参加してくれる回数も増えきている。また、市の担当者が、利用者の部屋を訪問し、声掛けしてくれる等顔馴染みの関係づくりに向けて継続的に取り組んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	目標達成計画としてスピーチロックを掲げたが、やはり多少スピーチロックによる行動の制限が行われている場面が見受けられているように思われる。	身体拘束に関する勉強会を1回実施し、職員間で共通認識を図る機会につなげている。スピーチロックの取り組みについては、まず各職員が頭の中で意識することをスタートとし、お互いチェックする、される中で気づきの場面を作りながら、少しでもゼロに近づけるよう継続的に取り組んでいる。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	法人での勉強会や外部への研修に参加したりして、常に気を付けて業務を行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修等に積極的に参加出来る環境を整え、制度について学ぶ機会を持てるようにしているが、残念ながら学ぶ機会に恵まれず、今年度も取り組む事が出来なかった。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	ここ数年入所者の方々の入退所がない為、契約は行っていないが、入所の申し込みで来所された方々とは、現在の状態・状況や家族の思いを時間をかけて聴く様にしている。又、施設の見学をして頂き納得したうえで申し込みをして頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者から何か訴えが聞かれる事はないが、普段の会話から引出し感じ取れる努力をしている。ご家族の方々からは面会等の機会に、よく話をする事でさりげない言動に気付けるようにし、要望があれば出来る限り対応している。	毎月発行の広報（利用者の写真入り）や、担当者からの手紙（生活ぶりを記した）を通して意見・要望を伺う機会につなげている。また、家族が運営推進会議に参加した時、通院時同伴の時等、各々の場面を利用しながら伺うようにしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	施設として毎月1回アミーチ会議を開催して、職員の意見や改善などの意見を聴く機会を設けている。	毎月行っている会議は、施設長も入り、職員全員（休み外）が参加し、活発な意見交換ができる場になっている。管理者は、日頃から職員の意見を吸い上げるよう心掛けており、職員も言いやすい風土の中で、色々な場面で迷った時は相談・助言し合うこともある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	今年度から人事考課制度を導入し、給与・賞与・昇格に反映させるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	今年度、中期経営計画を策定し、職員の資格取得と法人内外の研修を受ける機会を設けている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム協会の主催する研修に参加し、同業者との交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会・相互訪問等の活動に取り組んでいる。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	今年度も対象となる方はいないので、取り組みは行われていないが、家族から入所前の様子をしっかりと聴き、利用者が安心できるようにコミュニケーションをとり、利用者の思いをくみ取れるようにし、少しでも早く馴染みの関係を築けるようにする。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族から入所を希望した経緯等を含め、聞き取りをしっかり行い、早く環境の変化に馴染めるように取り組む。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談内容を聴きながら対応し、当ホームでの対応が難しい場合は、他事業所との相談も行うようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	何か（畑仕事や家事等）をする時は一緒に行うようにし、本人の意思を確認しながら、出来る事を更に見つけ出せるようにしながら、出来ない事も一緒に行う事で少しでも共に行なえる様に支援していく。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	どちらの家族も連絡を取るとすぐに対応して下さる事から、日常の生活の様子は毎月送付しているお便りで伝え、体調の変化等はその都度、電話連絡をし説明を行ない、通院等の判断は家族に委ね対応をしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	行きつけの美容院を利用し続けている方、ホームの通所サービスを利用されている方に知人が来ている際には交流できるようにし、ホームへの散歩を通して、より多くの方々と触れ合う機会を作るようにしている。	自宅を引っ越したため、今はない旧家が記憶にある利用者に対して、買い物のついでに旧家の周辺を廻ってくる等、本人の思い出を大切にした支援や、家族の協力をいただきながら、お墓参り等、利用者とかけがえのない亡き人とのつながりへの支援も行っている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士で声を掛け合って行なう事が多いが、トラブルが起きそうな場合は、職員が仲介役となり、良好な関わりを持てるようにする。又、孤立しそうな利用者には職員が声を掛け、本人の出来そうな事を行ってもらうようにする。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	併設の特養に住み替えになりそうになった際から、家族ともよく話し合い意向の確認をしたうえで、情報の提供をしっかり行い、出来る限りこれまでと同じ暮らしが出来るように支援していく。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	個性の違いを認めて、利用者の発言や行動を見聞きし、そこからどうしたいのかを考え、その人に合った生活が出来るように支援している。	認知症で訴えが困難な利用者に対しても、表情や言動を観察し意向の把握に努めている。利用者からのはっきりとした意向はめったに聞かれないが、訴えがあった際は可能な限り対応するよう努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	コミュニケーションを通じ、昔の話を聞いたりする事で、生活歴などを少しでも多く把握できるようにし、本人の得意な事を行ってもらい、出来ている事は続けて出来るように支援している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	出来る事を少しでも見つけられるように、レク等を通じて色々な事を行ってみるよう工夫すると共に、日々の利用者の表情を見て、今の利用者の気持ちを理解出来るようにしている。又、普段の生活で「出来る事」を行ってもらい維持出来る様に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者と家族の意見・希望を取り入れながら作成している。又、毎月の会議で職員の意見を聴き、日々の実施記録や担当者の思いと合わせて見直しを行っている。	担当者が記録する日々の実施状況を基に、毎月の定例会議で担当者を含めた職員間で、モニタリングを行っている。プランの見直し作成は6ヶ月毎に行っている。見直されたプランは、面会時や、通院同伴時に家族に説明し、確認していただいている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子の記録と並行して、ケアプランに対してどのように援助を行なえたかを毎日記録し、介護計画の見直しに活かし、申し送りノート等を活用しその日の利用者の様子や変化等を職員間で共有できるように努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	原則として通院は家族対応としているが、都合がつかない場合は対応している。又、急な通院、外出・泊にも出来る限りの対応をしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	買物外出訓練の際には、お店の方・お客様にご理解して頂き対応して下さる。又、市の健康診断に行った際にも、地域の方々にご理解いただいた上で、対応している職員の方々にも積極的に援助して頂いている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所前からのかかりつけ医を変更する事なく、継続して医療が受けられるように定期的に受診して支援している。受診の際には、利用者の現状報告や体調を等を通院カードを通し、医師に伝えるようにし受診が円滑に行なえる様にしている。	入居前から利用している県立病院、個人医院に継続して通院している。送迎や、診察時の同席は、家族対応としているが、家族との連携を密に図りながら、支援している。（病院・利用者間）相互で記入できる通院カードを活用することで、医療者との情報共有が図られている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	併設の特養に住み替えになりそうになった際から、家族ともよく話し合い意向の確認をしたうえで、情報の提供をしっかり行い、出来る限りこれまでと同じ暮らしが出来るように支援する。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	今年度は入院された方はいないが、入院した際には職員が病院へお見舞いをした時に情報交換をしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人・家族には状態の変化や低下がある場合は併設の特養への住み替えをする事を相談・説明し了解を得ている。状況を説明し、今後の方向を家族と繰り返し確認をしている。	同法人の特養ホームに入所になるケースもあるが、重度化しても出来るだけ環境を変えたくないという、本人・家族の意向には、出来る限り対応している。骨折や入院等で、レベルダウンが見られた際も、日常生活の中で機能維持の援助を行い、回復したケースもある。夜間の急変時等は、待機の職員が対応できるような体制をとっている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救命救急講習を受講し、応急手当や初期対応の訓練を定期的に行っている。又、急変時や事故発生時に備え、各マニュアルを作成し職員が周知できるようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	施設内で毎月1回、火災・地震に備えて夜間想定で発生場所を変え、様々な状況に応じて訓練を行っている。	先月（11月）は出来なかったが、毎月1回夜間の火災や、地震に備えた訓練を実施している。また、併設の特養ホームと連携した訓練も、年2回実施している。災害時に備え米、缶詰、乾物等を多めに準備している。	
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	日常の会話にも気を配り、言葉遣いが乱暴にならない様に気に掛け、分かりやすく方言を使い、安心した気持ちになって頂けるような声掛けを行なっている。	利用者本人からの羞恥心を表す表情の変化、言葉等をキャッチした時は、職員間で情報共有しながら、誇りを損ねないような支援を行っている。排泄介助時は、トイレのドアを閉めることを徹底し、また、昼寝をする利用者の居室のドアは、閉める等、プライバシーに配慮したケアを実践している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	話しを聞く姿勢を大切にし、利用者が話しをしやすい環境・雰囲気作りに努め、コミュニケ―ションを通じて好きな事を聞き出せるように努め、そこから出来る事を探せるようにすると共に、自己決定が出来るように選択肢を増やす等への工夫をしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務はある物のそれにとらわれず、その時々によって対応し、利用者のペースを把握するするように努め、無理強いしないようにタイミングを計り、納得のいく行動が出来るように努力している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	馴染みのある美容院に通い続けている方がいたり、カチューシャを使っている方、エプロン着用の習慣がある方、様々の形でその方らしさを続けていける様、支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食品の買い物・食事の準備や下ごしらえ、盛り付け・配膳から、食後の下膳・食器拭きや片付けまで、出来る方にはなるべく一緒に関わり、食事に関する意欲が高まるように取り組み、食事中の会話も大切にしている。	手作りのおやつ作り、流しそうめん、お茶会（定例）等、食に対する楽しみの場を提供する取り組みが、なされている。職員の食材の買い出し時に一緒に出掛け、食材を選ぶこと、職員と一緒に作った事業所の畑の野菜作り等、食への楽しみを引き出す支援を行っている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	摂取状況の観察を行ない、食べれていない方がいたら申し送り、続けて摂取量が少ないという事がない様に努めている。又、水分量は全員ではないが、少な過ぎないよう、摂り過ぎないようチェック表を活用し調整している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後必ず口腔ケアを行ない、一人で出来る人には見守りを行ない、介助が必要な際には本人が出来ない所を支援する。又、自歯がある方は磨き残しがない様に、仕上げ介助を行う。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チャック表を使用し、各個人に合わせて排泄パターンの把握に努め、トイレ誘導をする事でトイレでの排泄を促し、パット等の使用枚数を減らせるようにしている。自立の方も出来るだけ確認が行なえる様に気を配っている。	自立している方は、3名いる。その他の利用者は、日中はパンツで過ごす、そしてトイレでの排泄を基本にしたケアを行っている。失敗した時に、落ち込む利用者もいることから、パットを使用する等、本人の安心感を得ることを優先にした支援を行うこともある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	朝食時、リンゴと牛乳を摂取し、便秘解消に努め水分をこまめに取って頂けるようにし、苑内掃除に軽体操、散歩やレク活動で体を動かしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は午後としているが、希望があれば入浴出来る環境である。入浴のタイミングは本人の入浴したい時に入浴できる様に、声掛けも配慮している。又、仲の良い方と一緒に入る事により、入浴中の会話も弾み、より楽しく入浴できるように心がけている。	入浴は、1週間に3～4回で、冬期間は1週間に2回以上入れるように支援しているが、本人のタイミングに合わせ、無理強いしないようにしている。入浴日以外にも清拭、足浴を行うこともある。浴槽が広く、気の合う利用者同士がペアになり、楽しみながら入浴している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	活動と休息のメリハリや、浮腫防止・本人の体力の都合等々により、夜間の睡眠に支障がない様に昼寝をしている。夜間は、就寝・起床時間は個々に応じて支援しており、冬季は足をひざ掛けで包んだり、湯たんぽを使用するなどして、ぐっすり休んで頂けるように支援している。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬について分かるように利用者ごとの内服薬説明書があり、何時でも確認できるようになっている。各利用者ごとにケースに入れ誤薬がない様にし、服薬の際は、本人に薬を渡し、服薬の確認を確実に行っている。又、通院後に薬が変更になった場合は必ず申し送り、ノートに記録する事で情報を共有している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人が出来る事（家事・畑・洗濯物等）を活かし活動して頂き、レク・アクティビティを通しても得意な事を維持出来る様に支援し、日々の生活を楽しめるように取り組んでいる。		
49	（18）	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	イベント情報を積極的に入手して、利用者の方が行きたくなるような声を掛け、天気・気温をみて出来るだけ出かけられる様に支援している。又、買物外出訓練を始め、季節毎に花見・紅葉狩り等には通所サービスの方々と一緒に出掛けたり、今年は利用者からの希望だった釣り堀で釣りを楽しみ、芋掘りにも出掛ける事が出来た。	週2回、食材の買い出しに利用者4～5名ずつ参加し、食材選びに参加したり、自分の好きなものを買い物したりしている。日常的に天気の良い日には、外出や、ホームの横にあるベンチに腰掛け、利用者同士で話しをしながら過ごしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	職員が管理しているが利用者でお財布を持っている方は残金の確認を行っている。又、買物外出や行事等で外出した際に、レジで支払いしてもらえる様に支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	職員が作成しているが、月１回家族へのお便りの中で、状態等様子を知らせている。又、毎年年賀状を作成し、出来る限り自筆で住所・氏名を書いて頂けるように支援している。		
52	（19）	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	天井が高く、天気の良い日は明るい日差しが差し込み、暖かい空間を作っている。又、施設内でも季節感を感じられるように、飾ってある絵等を時期によって替えている。時期・天候・時間によって、照明の調整を行っている。	同一室内にある居間、食堂、そして、小上がりの畳のスペースは、障子造りがあり、こたつが設置されている。利用者は、日中から就寝時までここ（居間）で過ごす方が多い。それぞれの居場所を持っており、その中で話しをしたり、テレビを見たり、穏やかな表情で過ごしている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	談話室と和室にテレビがあり、気の合った利用者同士で会話を楽しんだり、一人でゆっくり過ごしたり、過ごし方は様々である。又、居室の出入りを自由にして居室で利用者と話せるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅から持参した物や、本人の作品を居室に飾ったり、たんす・衣装ケースは本人の物を使って頂いたり、家に居た時に使っていた物を置き、安心できるような空間を作っている。	ベッド、洗面台、クローゼット、加湿器等が備え付けになっている。特に、馴染みの物の持ち込みは制限していないが、入居時以降の持ち込みは少ない。居室入口には、それぞれの願いを書いた絵馬を下げている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	苑内は段差があまりなく、安全な歩行が出来る。本人の希望により、居室入口に貼り紙等をして分かりやすい工夫をしている。		